

## 犬養 廉先生をお送りする

近 藤 信 義

犬養先生を立正大学にお迎えしたのが昭和六十三年四月、それから早くも五年が経ち、いよいよお送りする日が近づいている。先生在職のこの五年間は創立一二〇年を迎えた立正大学の大きな変化の時であったし、国文学科は大学院博士後期課程の設置に向けて、その力を集中した時期であった。

先生の在職は短いものであったとはいえ、その間の役割は重く、且つ果たされた功績は大きい。その第一は国文学専攻の博士後期課程の申請・認可にあたって専攻科主任をお引き受けになり陣頭指揮をとられて、このプロジェクトを完成に導かれたことである。学内の関係された多くの方々の意志と好意と協力の賜物ではあるが、やはり一大事であった。とりわけ国文学科にとっては修士課程設置以来、四十年来の念願であり、その間学科にお迎えし、去っていかれた幾人もの先輩の先生方が思いを残されていた宿題であったことに思いを致せば、犬養先生の時代にやり遂げられたということの意義は深く、また先生の存在感の大きさに改めて敬意を表したい気持ちで一杯である。

先生の交際の広さと人望が立正大学の一大事業の完遂に、預かって力あるものであったことはいまでもないが、さらに、大学に全国大学国語国文学会を招致し、学会理事として学会運営に力を注がれた時には、正にその面目が発

揮されたときでもあった。まだ、学内の建築が完備していない折でもあり、会場を他大学に依頼しなければならぬ状況であったが、その交渉も率先してとられ、快い承諾をえて、滞りない運営に目を配られた。その間、立正大学の院生、卒業生の学会参加・発表にも心を用いられ、毎月、院生のために研究発表の機会を作り、学会活動への下準備に時間を使われた。こうして、いわき明星大学、中央大学、愛媛大学、そして立正大学と各地の学会活動を、犬養生を先頭に学内の諸先生、院生、卒業生ともも行い得たことはまことに楽しい思い出となった。

また先生の学生に対する心遣いは大変深いものがあるが、なかでも留学生に対しては格別で、専攻科主任としての責任と考えられたゆえもあるが、独自にご自分の時間を提供されて特別演習風に講座を設けられた。この意向は、博士課程開設において、留学生のための日本語、日本文学の特種研究としてカリキュラムに反映されている。おそらく今後の国際化に向けての具体的な対応の一つとして重要な講座となることだろう。

先生の学問が学生達に理解されてゆくには五年間はいささか短いといえるが、しかし、先生の人柄、識見を慕う学生が数多くいることは喜ばしいかぎりである。先生の業績が示すように、先生は平安朝文学のとりわけ日記文学の「注釈」に本領が発揮されていると言って誤りではないように思う。どの作品に対しても総合的な識見とバランスのとれた的確な注釈内容によって、いかにも温厚な先生らしさを感じさせられるのだが、とりわけ私には、先生の注釈の魅力は和歌に対してあるように思える。先生が施して居られる和歌の解釈は、平易な口語に訳されて、いかにもわかり易く、すらりと頭に入ってくる。よほど和歌に対する深い理解がおりなのだろうと思わずにいられない。

たとえば、先生に小倉百人一首の注釈がある。百人一首は毎年のように新しい注釈が出版されるという面白い現象を持っている。これもカルタ遊びの実用があるからといえるが、だから一つあればよさそうなものなのに何種類もある。だが、数種読み比べてみると、その解釈が一様ではなく、注者のそれぞれの個性や感性が出ているものだ。そこ

で先生の例を一つ。

筑波嶺の 峯より落つる みな川 恋ぞつもりて 淵となりぬる 陽成院

筑波山の峯からしたたり落ちるしずくが、一筋の糸となり、谷川となり、流れ流れていつの間にか、あの深いみなの川となるように、私のあなたに対する恋心も積もり積もって、気のついた時には、抜きさしならぬ、こんなに深いものになってしまったことです。

〔小倉百人一首〕創英社より〕

たとえば、右のような口語訳を付けられているのだが、上の三句の序の解釈が、下の句の恋心の一途さを表すように訳出されている。つまり、序の口語訳に配慮があり、そこがまた新鮮なところである。厳密な語注を踏まえた上で和歌の口語訳、それが単に意味がわかれば良からうというのではなく、訳文としての品格というものをうかがうことができる。学生諸君が先生のこうした魅力を受け取ってくれたらと期待するものでもある。

ところで文学者と酒は切り離せない話題だが、近頃の先生は御自身自重され、まさに「嗜む程度」といわれるが、それでも学会の後の一席の折などに嗜まれつつ話されるお話はまことに豊富な人生経験にもとづいた含蓄のある内容で楽しいものであった。どうやら北海道時代が先生の華々しい力量を発揮されていたらしいことも、酒席の端々に伺えるところである。また、先生を知る人から聞くところによると、滅多にソ連抑留時代の話題を口にされることがないという。しかし、最近は今頃そんな奥深くしまわれていた記憶をポツリと洩らされることもある。できれば、これからも撰生されつつ、そうしたお話を伺う機会を作っていただければ有難いことだと思ふ。

なにとぞ健康に留意され、お元気にすごされますと同時に、御自身の研究をますます楽しまれますように。

著書・注釈書・翻刻

- 昭和三九・四 源氏物語 須磨 桜楓社
- 昭和四六・六 四条宮下野集(影印・解題)(橋本不美男氏と共著) 笠間書院
- 昭和四六・六 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記(更級日記担当)『日本古典文学全集』小学館
- 昭和四七・五 概説日本文学史(太田善麿氏ほかと共著) 弘文堂書房
- 昭和四八・四 年表・資料 中古文学史(杉谷寿郎氏ほかと共著) 笠間書院
- 昭和四八・七 万葉・古今・新古今新解 新塔社
- 昭和四八・一一 『私家集大成 中古I』猿丸大夫集 明治書院
- 昭和四九・一二 兼載筆 百人一首(有吉保・橋本不美男氏と共著) 新典社
- 昭和五〇・一一 『私家集大成 中古II』相模集/出羽弁集/弁乳母集 明治書院
- 昭和五一・一二 小倉百人一首 『対訳 日本古典新書』創英社
- 昭和五三・四 源氏物語・帚木(奥出文字氏と共著)『影印校注古典叢書十七』新典社
- 昭和五五・四 御物本更級日記(影印・解題) 新典社
- 昭和五五・一〇 新古今和歌集・山家集・金槐和歌集(山家集担当)『鑑賞 日本の古典9』尚学図書
- 昭和五七・一〇 蜻蛉日記 『新潮日本古典集成』新潮社
- 昭和五九・三 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記(更級日記担当)『完訳日本の古典24』小学館
- 昭和五九・四 蜻蛉日記 更級日記 『現代語訳学燈文庫』学燈社
- 昭和六一・三 和歌大辞典(共編) 明治書院
- 昭和六三・一 詳解小倉百人一首 桐原書店

論 文

- 昭和三〇・一 菅原孝標女に関する試論——主としてその中年期をめぐって—— 国語と国文学
- 昭和三一・一 枕草子に見える感覚美 解釈と鑑賞
- 昭和三一・九 和歌六人党に関する試論——平安朝文壇史の一齣として—— 国語と国文学
- 昭和三二・八 秀能——生涯と歌風—— 国文学
- 昭和三三・一二 橘為仲とその集——古代末期の歌人像—— 国語と国文学
- 昭和三四・二 斎宮女御——作風と生涯 国文学
- 昭和三四・六 藤原顕綱の系譜 国語国文研究
- 昭和三五・一〇 更級日記臆断 国語国文研究
- 昭和三六・三 鶯のこほれる涙——二条后の一首をめぐって—— 国語国文研究
- 昭和三七・六 猿丸大夫とその集——王朝古家集に関する一つの試論—— 国語国文研究
- 昭和三八・一 撰関時代後期の文学潮流——後冷泉朝文壇への照明—— 解釈と鑑賞
- 昭和四〇・三 更級日記 国文学
- 昭和四〇・三 能因法師研究(一)——その歌人的出発まで—— 国語国文研究
- 昭和四〇・四 後拾遺和歌集 『平安朝文学史』 明治書院
- 昭和四〇・一〇 経信とその家集 国文学
- 昭和四一・九 能因法師研究(二)——青年期の周辺—— 国語国文研究
- 昭和四二・一 相模 国文学
- 昭和四二・二 田山花袋と蜻蛉日記 解釈と鑑賞
- 昭和四二・一〇 河原院の歌人達——安法法師を軸として—— 国語と国文学

犬養廉先生をお送りする

- 昭和四二・八 装える文芸 『日本文学の歴史』四卷 角川書店
- 昭和四三・三 勅撰集の社会的評価——中古—— 解釈と鑑賞
- 昭和四三・五 源氏物語と更級日記 解釈と鑑賞
- 昭和四三・七 原作との比較——かげろふの日記遺文・室生犀屋—— 国文学
- 昭和四三・九 平安朝の日記文学——蜻蛉日記の養女をめぐる—— 文学・語学
- 昭和四三・一〇 家集と日記——更級日記の場合—— 中央大学国文
- 昭和四四・三 更級日記の形成 中央大学文学部紀要
- 昭和四四・五 更級日記の虚構性——実人生とその自画像—— 国文学
- 昭和四四・九 平安朝歌壇史——中古後期 『和歌文学講座』三卷 桜楓社
- 昭和四五・五 清少納言の伝記 『諸説一覽 枕草子』 明治書院
- 昭和四六・九 勅撰集・補遺部分 『新版日本文学史2、中古』 至文堂
- 昭和四六・九 私家集・補遺部分 『新版日本文学史2、中古』 至文堂
- 昭和四六・一二 相模 国文学
- 昭和四七・四 王朝女流の日常 解釈と鑑賞
- 昭和四八・三 藤原長能とその家集——能因研究の一環として—— 中央大学文学部紀要
- 昭和五〇・七 あづまぢの道の果てよりも 『鑑賞日本古典文学』十卷 角川書店
- 昭和五〇・一〇 清原元輔——清少納言とその文学—— 『枕草子講座』一卷 有精堂
- 昭和五一・六 月——西行 国文学
- 昭和五一・六 更級日記 『中古の文学』 有斐閣
- 昭和五一・六 後冷泉文壇概説 『中古の文学』 有斐閣

犬養廉先生をお送りする

- 昭和五二・五 古今集の美 古典研究 尚学図書
- 昭和五二・六 勅撰集 別冊太陽
- 昭和五二・一 鑑賞・日本の名歌名句一〇〇〇／伊勢歌／甲斐歌／常陸歌／衣通姫／猿丸大夫／喜撰法師／蝉丸／安倍仲麿／小野篁／在原行平／上野岑雄 国文学（臨時増刊）
- 昭和五三・五 更級日記・成尋阿闍梨母集・讃岐典侍日記 『日本文学全史』2・中古 学燈社
- 昭和五三・七 平安和歌史と紫式部・和泉式部——文学史的定位—— 国文学
- 昭和五三・一二 相模に関する考察——いわゆる走湯百首をめぐる—— 『論叢王朝文学』 笠間書院
- 昭和五四・一二 百人一首の世界——百人一首全評釈（口語訳・作者）／一〇五〇番 国文学（臨時増刊）
- 昭和五五・一 歴史を彩った一〇〇〇の生涯／天智天皇／持統天皇／能因法師／良暹法師 別冊歴史読本
- 昭和五五・九 夕顔との出会い 『講座源氏物語の世界』一 有斐閣
- 昭和五六・一 更級日記——作品の構造—— 国文学
- 昭和五六・四 相模——「物思はしさ」のゆくえ 国文学
- 昭和五六・四 蜻蛉日記の構造 『一冊の講座 蜻蛉日記』 有精堂
- 昭和五七・一〇 歌人為頼——歌よみの家—— 国文学
- 昭和五八・三 孝標女——夢と信仰 国文学
- 昭和六〇・三 宇多・醍醐期の歌人たち——その動向をめぐる—— お茶の水女子大学附属高校研究紀要
- 昭和六〇・五 更級日記を考える——蜻蛉日記との関連において——古文研究シリーズ第一五号 尚学図書
- 昭和六一・一 更級日記——主題の形成 別冊国文学
- 昭和六一・三 そらになる心——西行に関する断章—— お茶の水女子大学附属高校研究紀要
- 昭和六一・一一 相模——和歌の才女たち—— 解釈と鑑賞

- 昭和六二・三 古今和歌集の歌人たち——撰者時代——『一冊の講座 古今和歌集』 有精堂
- 昭和六二・四 王朝和歌史の問題点 国文学
- 昭和六三・五 走湯百首論 『古典和歌論叢』 明治書院
- 平成元・三 孝標女の歌稿について——家集の存否を中心に——立正大学国語国文
- 平成元・三 走湯百首の世界 立正大学文学部論叢
- 平成二・一一 「枕」と「汗はじき」——私家集における日常性について—— むらさき
- 平成二・一二 「更級日記」の文学史的位置 『日記文学講座』四 勉誠社
- 平成三・二 王朝和歌の始発——六歌仙前夜まで——立正大学大学院紀要
- 平成四・三 蜻蛉日記に関する一視点——養女をめぐる問題について——立正大学文学部紀要

書 評

- 昭和四一・八 橋本不美男『院政期の歌壇史研究』（武蔵野書院） 国語と国文学
- 昭和四七・七 保坂都『大中臣家の歌人群』（武蔵野書院） 解釈と鑑賞
- 昭和五二・七 竹西寛子『青葉の時へ』（新潮社） 国文学
- 昭和五五・一〇 秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成） 国文学
- 昭和五八・八 竹西寛子『ひとつとや』（毎日新聞社） 週刊読書人
- 昭和五九・一 小谷野純一『平安後期女流日記の研究』（教育出版センター） 日本文学研究（大東文化大学）
- 昭和五九・八 久保田淳『花のもの言う——四季のうた——』（新潮社） 国文学

エッセイ・対談・その他



- 昭和四七・一二 王朝の冬 笠間リポート五号
- 昭和四九 源氏物語の窓 日本の古典4 『グラフィック版源氏物語』 世界文化社
- 昭和五〇・九 小町の恋——あはれてふことこそうたて 王朝和歌の世界1 俳句
- 昭和五〇・一〇 鶯の涙 王朝和歌の世界2 俳句
- 昭和五〇・一一 深窓の女君 王朝和歌の世界3 俳句
- 昭和五〇・一二 女流歌人相模 王朝和歌の世界4 俳句
- 昭和五一・一 薄幸の斎院 王朝和歌の世界5 俳句
- 昭和五一・三 建礼門院右京大夫 王朝和歌の世界6 俳句
- 昭和五二・一〇 竹西寛子『古典日記』解説 中央文庫
- 昭和五六・一〇 王朝女流歌人の系譜〈特集〉女流和歌の系譜(竹西寛子氏との対談) 短歌
- 昭和六一・六 夢野の鹿——西行和歌一首 短歌